

鎮守山が崩落しても滝や社殿は耐えた。 私たちも挫けてはいられない。

「災い転じて福となす」ということわざがありますが、いま、まさにその時なんだと感じています。貴重な経験をさせていただいたから、この状況を逆転させたい。思えば、人間の知恵の尺度で自然を征服しようとしてきた部分があるでしょう。人間が自然を侮っていた。そもそも水というのは、生命の母。水があったから緑ができて、生物や人間が生まれた。那智の滝は、そんな水が滝を伝って降りてくる神様の姿だと、神様の世界から天下ってくるものだという敬いの心から信仰が生ま

れた。水こそ、我々の源であり、自然の恵みであり、信仰の原点。人間は自然のご厄介になっている。畏敬の念と感謝を忘れてはならないと改めて感じました。
水害を体験したことで、信仰の対象でもある水の存在を再認識し、改めて敬う心が芽生えたという朝日宮司。災害に怯むことなく、むしろその表情は、希望の光を見ているようだ。
「災害で社殿裏の鎮守山が崩落し、巨石や倒木が落ちて来たにも関わらず、御本殿はびくともしていません。拝殿

や厨子も何ともない。那智の滝そのものも姿は変わっていません。その姿を見たら、我々が挫けてはおれない。神様というのは、人間のように心があると思いましたがね。そんな神様が御殿に宿っていると信じて、これからもたくさんの方々に参拝していただきたい。だからこそ、一日も早く復興させたい」。
災害は、自然が持てるべきエネルギーを発揮した結果でもある。ゆえに、偉大な自然が生きる熊野は、いまこそ、計り知れない神秘を蓄えた「神の里」といえるのかも知れない。

復興特別企画

熊野那智大社 朝日芳英宮司インタビュー

2011年9月、紀伊半島を襲った台風12号。

世界遺産に登録される熊野那智大社でも社殿裏の山が崩落し、境内に土砂が堆積するなど有史以来の被害を受けた。

だが、本殿や拝殿、那智の滝そのものは健在。

現在も堂々とした姿を見せる。その姿に光を見だし、復興に全力を注ぐ朝日芳英宮司に、現在の心境を訊ねてみた。